



## オリンピックから学ぶこと

ソチオリンピックが開幕しました。現時点でメダルを取った選手はまだいませんが、これからの日本人選手の活躍に期待しましょう。

さて、オリンピックにはメダルだけでなく、そこにたどり着くまでの日々にも数々のドラマがありますが、その一方で選手の服装や言動にも注目が注がれています。その代表的なものとして、今から4年前のバンクーバーオリンピックでは、日本代表選手の服装が大きな騒動になりました。今回は心配なさそうですが、今度は、日の丸を背負う選手としての自覚ある言動について、興味深い記事がインターネットに掲載されました。様々な立場の人がいて、人それぞれの考え方があるため、どれが正解というものはありませんが、“代表”の重さを考えさせられる内容でした。

オリンピックはまだまだ続きますが、競技だけでなく、このような視点から見ることによって、自分を見つめ直すきっかけになると思います。4年に一度のオリンピックからは、学ぶべきことがたくさんあります。

今回のオリンピックで競技よりも注目されているものがある。スノーボード・ハーフパイプ男子代表の国母和宏選手の服装問題である。日本を出発してバンクーバー入りする際、日本選手団の公式プレザー姿でシャツを外に出し、ネクタイをゆるめていたのがだらしがないとされたことである。この騒動は世代で賛否が分かれると思う。だぶだぶのウエアを腰よりずり下げて着こなすハーフパイプの選手たちにとって、シャツをズボンに入れるセンスは絶え難いものかもしれない。しかし、同時に、日本代表として注目を浴びる選手としての自覚ある行動も求められる。アメリカメディアでさえ、「垂れたズボン、外に出したシャツに、緩めたネクタイ…その辺にいるだらしのない21歳」と表現した。また、時にルールを守り、周りに合わせる必要があることを指摘するとともに、スーツが国民の税金で用意されたことにも触れた。

たかが服装がこれだけの大きな騒動に発展した今回の出来事は、まさに「したくてもしてはならないこと。やりたくなくてもやらなければならないこと」を改めて考えさせられた。これから、入試や卒業式、そして1年の締めくくりを迎えるにあたり、制服の着こなしはもちろん、髪型、まゆ毛なども含めた服装を今一度見つめ直してみよう。「だらしのない21歳」ではなく、「さわやかな13～15歳」であってほしい。

※平成21年度浦島伝説38号(H22.2.17発行)再掲

明治天皇の玄孫で日本オリンピック委員会会長・竹田恆和氏の息子でもある竹田恒泰氏がツイッターで口を開いた。そこでは、「メダルを取る可能性がある日本選手」へ宛てて、2点の注文をつけている。

1点目は、オリンピックでおなじみの光景となっている「メダルを噛む」行為をしないよう求めるもので、「品がない上に、メダルを屈辱することになる」と言う。2点目は、国歌が流れる際には「聴くのではなく歌え」というもの。また「日本には国歌斉唱時に胸に手を当てる文化はない」とした上で「直立不動で歌うこと」と追加で注文をつけた。

さらに、選手のコメントについても、「予選落ちしてへらへらと『楽しかった』などと語った選手」を問題視し、負けた際のコメントとして「思い出になったとか、楽しかったなどはあり得ない」としている。選手の発言くらい自由でいいのではとの反論には、「日本は国費を使って選手を送り出しています。選手個人の思い出づくりのために選手を出しているわけではありません」と返す。

一連の発言は口調こそ「命令的」のものが多いものの、あえてツイートした背景には「世界の舞台で活躍するアスリートには、日の丸を背負った自覚をもって、立派に振る舞ってほしい」との思いがあつてのことだという。インターネット上では「おっしゃる通りですね」「あのメダル噛むのみっともないよなあ」「国の代表だからこれは正論」と賛同の声がある。

だが、その一方で「楽しかったと言った人が努力してないと決めつけるのは如何なものか」「『負けて申し訳ありません』なんて言われたら、スポーツは選手と国民の間の義務感と圧力の交換でしかなくなってしまふ」などと反論も寄せられている。

※J-CASTニュース(2/9)から一部抜粋